

□12月31日礼拝説教(隅野徹牧師短縮版)
「行って拝もう」(マタイ2:4~11)

今回10節の「喜びにあふれた」という言葉から示されました。それは博士たちが、いつどのタイミングで「喜びにあふれた」と聖書がいつているか？ということに目が留まったからです。博士たちが喜びにあふれたのはイエス・キリストを肉眼でみたときでもなければ、星が不思議なように博士たちを導き始めた場面でもありません。幼子のいる場所の上で星がとまったときに、喜びにあふれたのです。

これはあくまで私の解釈ですが、ここまで東方から救い主に会うための長い長い旅をしてきた博士たちが、その旅のゴールを神によって示された瞬間が、星が止まって見えたこの時であった。だから博士たちが喜びにあふれたのは、救い主に会いまみえることができる、そのゴールをはっきりと心で捉えた時なのだとの思いが私に迫ってきました。

この不思議な星が天文学的に何なのか、どういう現象なのかということを経理的に理解するよりも、この博士たちを導いた星は、すべての人間の心の中に同じように輝いている。救い主イエス・キリストのもとへと導くものとして、私たち自身のうちに存在しているのだ、と理解するのがよいと私は考えます。

私たちは今、肉眼でイエス・キリストを見ることはできません。将来的にもどのように、キリストと会いまみえることになるのか…それははっきりとは分かりません。しかし私たちはキリストのもとに導かれ、いつか直接お会いできるという究極のゴールへと導かれる希望が、聖書全体から教えられています。博士たちがイエス・キリストに会った時ではなくて、その前に、確実に会えるというゴールを確信したとき喜びにあふれたことを私たちも忘れず、新しい年を歩んでまいりましょう。(終)